古代史シリーズ2

「古事記と日本文化」

本冊子は、筆者が古代史セミナーを実施している中で、講義録を製本化したものです。

記紀による日本の歴史は高天原の神話の世界、天孫降臨から始まる天皇の国家づくり、大和朝廷から奈良までの経緯を神々と天皇の施策で記述されています。記紀を読み解くには、この流れを把握することが必須です。当冊子では主要な神々と天皇を取り上げ古代史の基本的な流れと神々と天皇の関係を理解します。

著者：情報戦略モデル研究所

井上　正和

はじめに

本冊子は、筆者が古代史セミナーを実施している中で、講義録を製本化したものです。

筆者は、以前ITメーカーのSEやコンサルタントが専門でした。十年ほど前から大学での講義をきっかけに古代の文化や歴史に興味が湧き、古代史のテキストを作り講義するようになりました。

元々、素人が古代史セミナーのテキストを作る訳ですから、古事記や日本書紀(以降は「記紀」という)が読めなかったり、古代史は良く分からないと思われている初心者の方々が持たれる感覚が同様に疑問になりました。

当該古代史セミナーが以外に人気があるのは、素人の視点で不明点を解説することにあるのかもしれません。

また、体系化されていて分かり易いとお褒めをいただきますが、元SEとしてシステム設計やプロジェクトマネジメントで体系化することが性癖になっていることが寄与しているのかもしれません。

日本の文化は縄文時代(一万五千年前)から現代までの積み重ねで築かれている特徴がありますが、日本にいますとその文化が何かも意識しないで過ごしています。

古代史シリーズ2「古事記と日本文化」では、日本の神々から天皇への継承系譜を追い、後世に重要な文化的影響をもたらした天皇とその政事(まつりごと)を古事記・日本書紀から要約します。高天原からの3柱の天孫降臨、天皇の重大足跡、日本文化の基盤にある飛鳥・白鳳・天平時代の治政と文化を探ります。

本冊子は、記紀を読み解くために、参考図書を主体的に活用し記紀で裏付けをする形で進みます。図柄はウキペディアからかなり引用しています。活用しました主要参考図書は次の通りです。

＋「世界と日本の見方」　松岡正剛　(春秋社)
＋「古事記」　竹田恒泰　(学研)、「日本書紀」　宇治谷孟(講談社)
＋「古代日本誕生の謎」　武光誠　(PHP)
＋「日本の歴史　本当は何がすごいのか」　田中英道著(扶桑者)
＋「海道東征」をゆく　(産経新聞社)　など

本冊子の古代史シリーズ2「古事記と日本文化」の全体構成は次の目次にあげて置きます。

◎ 古代史シリーズ2「古事記と日本文化」の目次 ◎

第一章「日本の3つのパンテノン(神殿)」……4

高天原から降臨した3柱である日本の3つのパンテノン(神殿)と古代大和朝廷の繋がりは何か。出雲や日向の記紀での位置づけを掴みます。

第二章「神と天皇」……21

大和朝廷から奈良時代までに大きな影響を与えた天皇の業績とその日本文化づくりの御心をおさえます。

第三章「大和朝廷から飛鳥時代へ」……36

纒向遺跡(古代大和朝廷)から大和朝廷への文化の変遷、および仏教が導入された「飛鳥時代」の文化とその発展を支えた天皇の施政を取り上げます。

第四章「白鳳・天平文化」……49

仏教が導入された「飛鳥時代」から仏教が花咲く「白鳳・天平」の文化とその発展を支えた天皇の施政を取り上げます。

第五章「神武天皇」……64

大和朝廷を作った初代天皇である神武天皇。大和に君臨するまでの軌跡をたどります。

おわりに……80

◆第一章「日本の三つのパンテオン」の目次

第一話　神代の構造……5
高天原
葦原中国
黄泉の国

第二話　三つのパンテオン……7
日向パンテオン
出雲パンテオン
大和パンテオン

第三話　出雲伝説……10
出雲の遺跡
記紀が伝える国譲り物語

第四話　日向伝説……13
天孫降臨
日向の三代神

第五話　大和朝廷の誕生とその経緯……16
纒向遺跡と古代大和
大和朝廷への経緯

コラム:「天孫降臨の随伴神」……20

第一話　神代の構造

古事記では、まず神々がおわします高天原の「神代の神話」の時代があり、その後に葦原中国（あしはらなかこく）に降臨した天皇の話に進みます。天皇期になりますと、高天原と直接関係する初代天皇になる神倭伊波礼毘古命（カムヤマトイワレビコノミコト：以降はイワレビコと記す）が東征し、橿原宮（かしはらぐう）を建て大和に居を構え神武天皇になられます。その後は古代大和から始まり全国を統治して行く天皇紀です。つまり、葦原中国が大和に変わり天皇の統治の話に移っていきます。

◆高天原

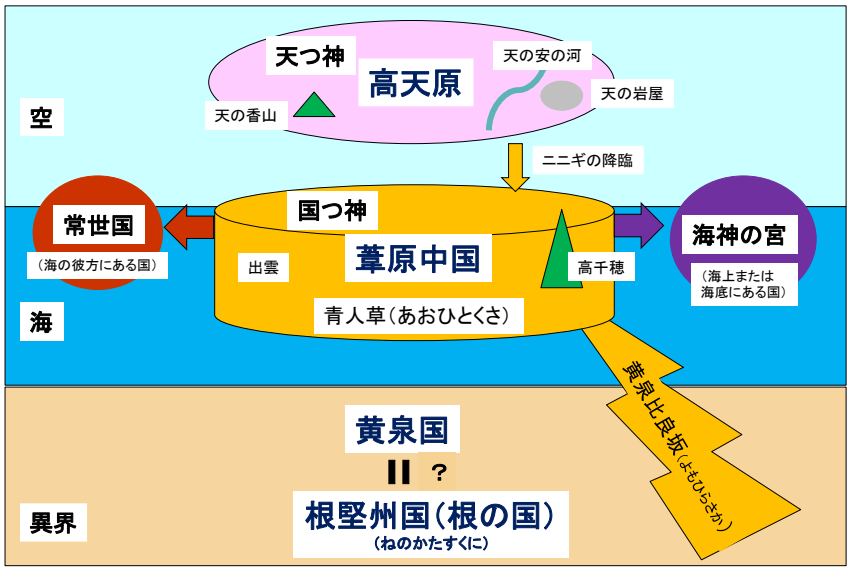
神代の世界は、「空」、「海」、「異界（いかい）」で構成され、「空」には高天原があり、「海」には葦原中国があり、「異界」には黄泉国（よみのくに）があるという。

高天原は、アマテラスが統治する天の世界であり、そこには、天の香山（かぐやま）がそびえ、天の安の河が流れ、天の岩戸があり、多くの天つ神（あまつかみ）がいる。天つ神の中には、天の安（やす）の河原でのあらゆる軍議での助言者である知恵の神の思金神（オモイカネノカミ）を始め八百万（やおよろず）の神がいる。阿波国風土記逸文には、大和三山の一つである天の香具山は天から降ってきたという伝承があり、大和三山の中で最も神聖視される山である。

◆葦原中国

葦原中国（あしはらなかこく）の「葦原」とは、葦が生い茂る未開の原野のことで海に浮いている。葦とは人間のことで青人草（あおひとくさ）と言う。十七世紀、パスカルが「人間は考える葦である」といいましたが、古事記が書かれて千年後でも同じことを考えたのですね。「中国」とは、高天原の天上と地下世界「冥界（めいかい）」の中間にある国という意味です。ここには国つ神（くにつかみ）が居て、葦原中国の土地を領有しています。国つ神の中で一番大きな神は出雲の神です。この葦原中国が浮いている海には常世国（とこよのくに）と海神の宮（わたつみのみや）があり、葦原中国に繋がっています。さらに、葦原中国は黄泉比良坂

参照資料－1：神代の構造：高天原と葦原中国



出典：「ゼロから知る「古事記」（Gakken）

（よもひらさか）を通して黄泉国（よみのくに）にもつながっています。この葦原中国は国つ神が所有していますが、この国は高天原が支配する国になります。

常世の国とは、海の彼方にある国です。国つ神を助けたり、葦原中国から消えて行く神の国です。中国、朝鮮やインドからの渡来人の神様を意識したのかもしれません。

もう一つの海神の宮（わたつみのみや）は、海上または海底にある国です。記紀に登場する海神（わたつみ）は朝鮮との交易で活躍する倭国の船頭です。古代は小さな手漕ぎ船や帆船で対馬海峡や玄界灘を渡るのですから、風や潮そして天気を読んで無事に航海させてくれる船頭は海神だったのでしょう。北九州や山陰沿岸や壱岐・対馬などにそういう海神がいたと言われています。そういう場所が海神の宮だったと想定されます。

◆黄泉国

さらに、黄泉比良坂（よもひらさか）があって、高天原は黄泉国とも繋がっています。黄泉国は異界で海の下にあります。古事記に出てくる出雲にあると言われる根堅州国（ねのかたすくに）が黄泉国といわれます。根の国ともいわれますが、海の下、地中にある世界です。ここへ黄泉比良坂を使って降りていくことが出来ます。伊邪岐尊（イザナミノミコト）は亡くなった伊邪那美尊（イザナギノミコト）に会うために黄泉比良坂を通って黄泉国にいる伊邪那美尊を訪れます。この国は死後の世界ですが、伊邪那美尊のように遺体が動き回る世界のようです。黄泉比良坂を通って現世との往還もできるのです。

第二話　三つのパンテオン

松岡正剛氏は著書「世界と日本の見方」の中で、三つのパンテノン（神殿）という表現を使用しています。ローマのパンテオンをもじって、日本には高天原から降りてきた三人の神があり、三つの聖地にパンテノンを作ったのだと述べている。三つの聖地とは、「出雲」、「日向」、「大和」である。高天原から降臨する神は三種の神器を天照大御神から授けられて降臨する。

◆出雲パンテオン

高天原から最初に降臨した神の地は「出雲」である。高天原での天照大御神（アマテラスオオミカミ）の弟である須佐之男命（スサノオノミコト）は高天原で注乱暴狼藉を働いたことに対して、八百万の神が議論の後、高天原から追放されます。須佐之男命は、出雲国（島根県）斐伊川（ひいがわ）の上流の鳥髪（とりかみ）に降臨する。（注）新嘗祭（にいなめさい）などの神事を行う御殿に糞をまき散らしたり、田の畔を壊し、溝を埋めたりした。

この斐伊川を上って行くと老夫婦が娘を挟んで泣いているのを見つけます。泣いているその理由を聞くと、この時期、八岐大蛇（やまたのおろち）が現れ、娘を一人ずつさらっていき、今年最後のこの娘がさらわれるという。この娘が櫛名田比売（クシナダヒメ）で、須佐之男命が八岐大蛇に立ち向かって櫛名田比売を助ける物語が「八岐大蛇伝説」です。八岐大蛇を酒に酔わせて退治し、その尾から出てきたのが「草薙の剣（くさなぎのつるぎ）」です。須佐之男命はこの剣を天照大御神へ献上します。現在も天皇継承時の三種の神器のひとつになっている剣です。八岐大蛇が退治された時、伝説では、その血で斐伊川が真っ赤に染まったと言われています。実際に斐伊川の上流は蹈鞴鉄（たたらてつ）の原料の砂鉄の産地であり、この川は酸化鉄で赤く染まっています。そのことから、八岐大蛇は斐伊川そのものを言ったのではないかと言われています。八岐大蛇退治の後、須佐之男命は櫛名田比売（クシナダヒメ）と結ばれ、日本最古と言われる和歌を詠んでいる。

「八雲立つ　出雲八重垣　妻ごみに　八重垣作る　その八重垣を」。その意味は、「ここ出雲に立ち上るのは八重垣のような雲だ。妻と住む宮にも八重垣を作っている　そう八重垣を」という歌である。

須佐之男命の六代目の子が大黒様として知られる大国主神（オオクニヌシノカミ）です。少名毘古那神（スクナヒコノカミ）と共に国造りを行うが、少名毘古那神は途中で常世の国へ去ってしまう。一人になった大国主神が悩んでいると、夢枕に「大物主大神（オオモノヌシノオオカミ）」が現れる。「あなた様はどなたですか？」と聞くと、「私はおまえの幸魂（さちみ

たま)、奇魂(くしみたま)であり、私を三輪山に祀れば国造りを手伝おう」という。夢のお告げ通りにすると、国造りが完成したと古事記に記されている。国造りが完成すると、高天原からの要求があり「国譲り」が行なわれる。葦原中国は高天原が知らす(治める)国であるからである。

ちなみに、幸魂、奇魂とは、日本神道の人の心は四つの魂で出来ているという「一霊四魂」から来ている。一霊四魂とは荒魂(あらみたま)、和魂(にぎみたま)、幸魂、奇魂で、荒魂は「勇気、荒々しさの神霊」、和魂は「親、親しく交わる神霊」、幸魂は「愛、人を幸せにする神霊」、奇魂は「智、不思議な力で物事を成就する神霊」をいう。大物主大神は大国主神の幸御魂、奇魂ですから、同一の神ということになります。

さて、この大和にある三輪山の話は出雲の勢力が出雲国だけでなく、大和地域も含め全土に広がっていたことを表し、そして新たな大和にできた天照大御神につながる王家が出雲勢力を従えたことを想起させます。次に日向パンテノン伝説を紐解いてみましょう。

◆日向パンテオン

日向伝説は、瓊瓊杵尊(ニニギノ命)の天孫降臨で始まる。葦原中国の平定と大国主神からの国譲りが確定したのちに高天原から降臨する。三つのパンテノンの中では最も正統派の降臨になる。

高天原で、天照大御神は自分の子の天忍穂耳命(アメノオシホミミノ命)に降臨を命じるが、瓊瓊杵尊が生まれたばかりなので、こちらの方が降臨には適切と言って譲る。天照大御神の孫が降臨することになったから天孫降臨という。降臨の際に、多くの注随伴神(ずいはんしん)を従えて日向の高千穂の峯に降り立つ。注随伴神には、葦原中国の案内役で猿田毘古神(サルタヒコノカミ)、天の岩戸前で踊った天宇受売神(アメノウズメノカミ)、高天原の知恵者の思金神(オモイカネノカミ)、天照大御神が隠れた天の岩戸を押し開いた天手力男神(アマノテヂカラノオノカミ)等多数である。(注)詳細はコラムを参照。

瓊瓊杵尊は降臨して木花之佐久夜毘売(コノハナサクヤヒメ)に一目ぼれして結婚する。瓊瓊杵尊の三代後の子孫が神武東征をおこなうイワレビコ、後の神武天皇である。イワレビコは大和に東征し、大和に橿原宮(かしはらぐう)を造り、大物主大神の娘、伊須気余理比売(イスケヨリヒメ)と結婚する。大和の統治には三輪山(出雲勢力)に協力を得ることが必須であったことが分かる。

◆大和パンテオン

記紀を読むと、大和へは瓊瓊杵尊(ニニギノ命)の兄、天火明命(アメノホアカリノ命)の子孫である饒速日命(以下、ニギハヤヒノ命)が降臨している。それは神武東征でイワレビコが大和を平定する時に帰順し、由緒を語ることから分かる。ニギハヤヒノ命は降臨したあと、大和の国つ神の長髄彦神(ながすねひこ)の妹、御炊屋姫(みかしやひめ)と結婚し、宇麻志麻遅命(ウマシマジノミコト)をもうける。宇麻志麻遅命は古代の天皇家を支える物部氏の祖と書紀に記述されている。

大和には元々、三輪山の神の大物主大神がいた。この神は葦原中国の全ての神を仕切っていたと思われる。そのことに関して書紀に崇神天皇(十代)五年の条に記述がある。

「国内に疫病多きとき、天照大御神と倭大国魂神(ヤマトオオクニタマノカミ)の二神を天皇の御殿に同居させた。しかし、二神の同居には畏れがあり、天照大御神を注笠縫邑(かさぬいむら)に祀った。…大物主大神は大田田根子(オオタタネコ)、倭大国魂神を市磯長尾市(イチシノナガオチ)を祭主にした。」

つまり、三輪山の神として一つに統一されていた神を、葦原中国の神である三輪山信仰の大物主大神、そして太陽神としての天照大御神、大和の地主神としての倭大国魂神に、三分割したことが記述される。三神はそれぞれ大神神社、伊勢神宮、大和神社に祀られている。

(注)笠縫邑とは、三輪山のふもとにある邑で、元伊勢と言われる檜原神社がある。伊勢神宮へはこの邑から二十五か所の変座の後に伊勢に落ち着く。

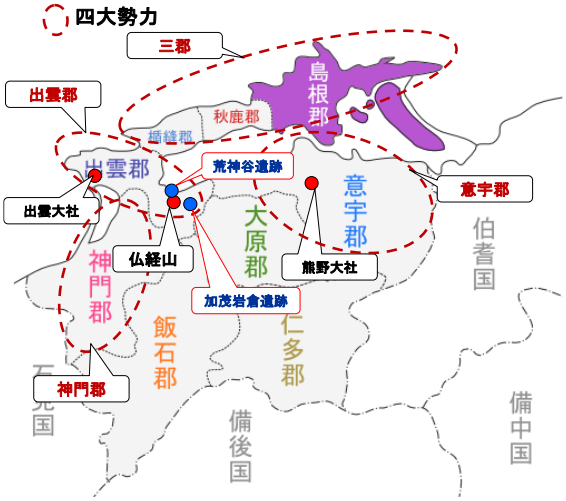
ニギハヤヒノ命は日向に瓊瓊杵尊(ニニギノ命)が降臨される前に、大和に降臨されているのであるから、大和にはニギハヤヒノ命が王国を既に持っていたことになる。しかし、初代天皇になるイワレビコ尊が神武東征で大和を制し、古代大和王国を開くことになるということはニギハヤヒノ命が大和を完全に掌握できていなかったことを意味する。第十代の崇神天皇まで三輪山の影響があることでそれは理解できる。

第三話　出雲伝説

出雲は一九八〇―九〇年代に二つの遺跡、荒神谷（こうじんだに）遺跡と加茂岩倉（かもいわくら）遺跡が発見されるまで、伝説の国であった。この遺跡が発見されてから、北九州、大和に並ぶ第三の文化圏、北九州とは別の発展を遂げた出雲大国の姿が浮かび上がってきた。一世紀中葉に出雲文化は急速に発達し、北九州からの弥生文明が出雲独自の文明に変わる。それは、北九州の初期の稲作を担った集団が用いた遠賀川式土器が出土するし、一世紀中葉に、北九州の弥生式土器とは異なる出雲独自の口縁端部が凹形の土器、凹線文土器が出土したことで異なった文化圏に変わっていったことが認識された。

◆出雲の二大遺跡

参照資料-2 :古代出雲豪族図



参考資料－３　荒神谷と加茂岩倉遺跡

荒神谷遺跡と加茂岩倉遺跡の出土から、出雲は二世紀中葉に全盛期を迎えていたことが証明される。

①　荒神谷遺跡

一九八四年、荒神谷遺跡からの三五八本の銅剣（中細形銅剣）が発掘された。この時点までの銅剣の発見数は全国合計でも三百本の発見しかないことを見ると、驚くべき数量であった。今までの古代歴史の大変更が必要になった。草薙の剣から銅剣信仰がこの地には根付いていた。また、この地は御神体となる銅剣を出雲の

聖地の仏経山麓(ぶっけいさんろく)に集めた縁結びの祭祀が行なわれた場所と言われている。縁結びの祭器であるから、出雲の地域の豪族の交流が行なわれたのである。それは、出雲風土記に仏経山は神名火山(かんなびやま)と言われ、神の山とあり、出雲のすべての古墳はこの山が見える位置に作られていることが出雲風土記から分かったからである。。

もう一つは、三五八本の銅剣の数である。意宇郡(おうぐん)の列の銅剣は三十四本、風土記による神社数は六十七社。この数の違いは大和朝廷が出来てから意宇郡に国衙(こくが)が置かれたため、国衙に移動してきた豪族たちが自家で祭る神を分社して作ったためといわれる。それは他の主要郡からの出土を見れば明らかである。三郡(楯縫(たてぬい)郡、秋鹿(あいが)郡、島根郡)では銅剣百十一本で風土記による神社百十三社。出雲郡は銅剣百二十本で風土記による神社百二十社。神門郡では銅剣九十三本で風土記による神社九十七社である。。出雲の各郡の各首長を集め、祭祀した場所であることに合点が行く。集めたのは出雲伝説にある大国主神であろうと思われ、伝説から歴史への変換がなされた遺跡である。(注)三郡とは、楯縫郡、秋鹿郡、島根郡の宍道湖の北側に連なる半島にある三郡をいう。

② 加茂岩倉遺跡

一九九六年、加茂岩倉遺跡から三八個の銅鐸が発掘された。この遺跡は農道を工事中に偶然発見されたものであるが、荒神谷遺跡に匹敵する衝撃的な事実が明かになった。それは、全国でも一箇所で二四個の出土が最大であったことを考慮しても大きいが、それだけでなく、この遺跡は近くに矢櫃(やびつ)神社跡があり、現在は磐座(いわざ)を残すだけになっているが、磐座を祀るこの土地の首長の所有物と考えるのが妥当と判断された。ということは、この賀茂岩倉のような遺跡が今後発見される可能位は高いということを示したのである。

二世紀中葉の大和朝廷成立前の大和、河内では出雲と同じ鋳型の銅鐸が出土する。銅鐸が壊され三角縁神獣鏡の銅鏡祭祀に移行した纒向遺跡は三世紀である。三輪山信仰が大物主大神を表すことから古代大和が創られる前は出雲の政権があったでのであろう。

◆記紀が伝える国譲り物語

古事記に記されている国譲り神話は大和朝廷が出雲国を従わせた物語であるが、大きな戦争があったことを示す考古学的資料は無い。このことは神話通り、話し合いでの禅譲であろうことを意味している。古事記の記述を読み解いてみよう。

天照大御神は、大国主神によって葦原中国が平定されたことを受けて、建御雷之男神(タテミカヅチノオノカミ)と天鳥船神(アメノトリフネノカミ)を出雲の大国主神に遣わして言う。

「汝がうしはける(領有する)葦原中国(出雲)は我が御子(みこ:天照大御神)の知らす(治める)国である。と任命(命じること)なさった。汝の考えはいかが」と、大国主神は二人の息子が決めることと伝え、息子と相談する。二人の息子とは、事代主神(コトシロヌシノカミ)と建御名方神(タケミナカタノカミ)である。弟の建御名方神が反対し、建御雷之男神と力比べをすることになる。

建御雷之男神は、千人がかりで引くほどの大きな岩を指で弄びながら来た建御名方神の手を握りつぶし、たちどころに遠くへ投げ飛ばした。命の危険を感じた建御名方神は、諏訪に逃げ、今後この地から他へは行かないことを誓い、許しを請う。建御名方神は現在の諏訪大社の祭神である。

二人の息子の同意の報告を受けて、大国主神は高天原に届くほどに千木(ちぎ)を高く建てた壮大な宮殿造り祀られることを請い、許される。現在の出雲大社である。高天原から天穂日命(アメノホヒノ命)が降臨し、出雲国造と出雲神社宮司になる。高天原からの降臨であるから出雲国の監視役として派遣されたと考えられる。現在は千家といい、二〇一四年秋に高円宮家の二女・典子女王と、千家国麿氏がご結婚されたのは記憶に新しい。

事代主神(コトシロヌシノカミ)に関しても、出雲に美保神社の「青柴垣(あおしばがき)神事」が残っている。この神事は事代主神が国譲りを迫られ、同意の後、注天逆手(あまのさかて)で船を青柴垣に変えて海の中に姿を消す。青柴垣とは魚とりの仕掛けで入ったら出れない。(注)天逆手とは、呪術(じゅじゅつ)の一つで手の甲で拍手。音がしない。

出雲の主要なリーダーが総て表舞台から姿を消している。戦わずして姿を消したということは大和での大王家の力が余程強大になっていたと想像できる。

第四話　日向伝説

日向伝説を、記紀では高天原から降臨する正統派であり、天孫降臨であることを伝えている。高天原の神の世界から、葦原中国で初代天皇、神武天皇になる神倭伊波礼毘古命(カムヤマトイワレビコノミコト:以降、イワレビコ命)が大和に向けて日向から出立する神武東征までの物語である。この物語には二種類の神が現れる。高天原から降臨してくる神々の天つ神(あまつかみ)と葦原中国にいる国つ神(くにつかみ)です。国つ神は葦原中国の豪族の首長を指して言います。

◆天孫降臨

出雲の国譲りの承諾を建御雷之男神(タテミカヅチノオノカミ)と天鳥船神(アメノトリフネノカミ)からの報告を受けた天照大御神(以下、アマテラス)は、「葦原中国(出雲、大和)に降って、国を知らせ(治めよ)」と息子の天忍穂耳命(アメノオシホミミノミコト)に仰せられた。天忍穂耳命は「降臨の準備中に子供が生まれたので、子供の瓊瓊杵尊(以降、ニニギノ命)を降ろすべき」と申し出ます。

アマテラスはニニギノ命に三種の神器「八尺勾玉(やさかのまがたま)」、「八咫(やた)の鏡」、「草薙剣(くさなぎのつるぎ)」を渡して、「この鏡は、私の御魂としてわが身を祭るようにして拝みなさい」と仰せられる。鏡に対する信仰はここから始まります。古代大和遺跡の纏向遺跡で銅鐸が破壊され、三角縁神獣鏡が出現するのは、鏡を信奉とする種族が大和へ乗り込んでいったと考えるのが穏当であろう。九州にいた種族が大和に移動したというのはこの点にある。ちなみに、現在、三種の神器は八咫鏡が伊勢神宮に保管され、八尺勾玉は皇居に、草薙剣は熱田神宮に分散し保管されている。

さて、高天原の天つ神は降臨するとしても葦原中国にどうやって降りるかは不案内です。そこに出てくるのが国つ神の猿田毘古神(サルタヒコノカミ)である。ニニギノ命は、猿田毘古神を案内役にして、注随伴神である天宇受売神(アメノウズメノカミ)、思金神、天手力男神(テヂカラオノカミ)等を伴い、高千穂の峰に降臨されます。

(注)コラム参照。

◆日向の三代神

天孫降臨した三ギノ命は天つ神ですが、葦原中国に降りたのだからその子供以降は国つ神になるかと言うと、そうではありません。国と神を統治する天皇になります。三ギノ命から山幸彦、葺草葺不合命(ウガキフキアエズノミコト)を経て三代目にイワレビコ命が生まれ、大和で天皇の初代、神武天皇になります。三ニギノ命は降臨後、木花之佐久夜毘売(コノハナサクヤヒメ)に出合い、一目ぼれして結婚します。

木花之佐久夜毘売は山の神である大山津見命(オオヤマツミノ命)の娘です。大山津見命は伊邪那岐命と伊邪那美命の子供でありアマテラスと兄弟神です。ということは、木花之佐久夜毘売と三ギノ命は人間界では親戚になります。出雲伝説でのスサノオと結ばれる櫛名田比売(クシナダヒメ)も大山津見命の娘です。神様の世界では、人間界の婚姻ルールは通じないようです。ちなみに、木花之佐久夜毘売は富士山信仰の浅間(せんげん)神社の祭神(さいじん)で、大山津見命は丹沢山系の霊山、大山にある大山阿夫利神社(おおやまあぶりじんじゃ)の祭神です。富士山と大山は対面していますので、親子でお互いに見守っているのかもしれません。少し脱線しました。元に戻しましょう。

さて、三ギノ命と結ばれた木花之佐久夜毘売は、一夜で身ごもります。さすがに、三ギノ命も「国つ神の子供ではないのか」と詰問します。木花之佐久夜毘売は、「私の生む子が、もし国つ神の子ならば、無事に出産することはないでしょう。しかし、もし天つ神の子であるならば。無事に出産することでしょう」と云うと、出入り口の無い八尋殿(やひろどの)に入り、火をつける。燃え盛る火の中で子を産みました。火の中で生まれた子は、火照命(ホデリノミコト)、次に火須勢理命(ホスセリノミコト)、そして火が修まる頃生まれた子、火遠理命(ホオリノミコト)を生む。火照命は海の獲物をとる人という意味で「海幸彦」とも言います。火遠理命は山の獲物をとる人という意味で「山幸彦」とも言います。

ある時、海幸彦と山幸彦はそれぞれが持つ道具を交換して使ってみようということになります。ところが、山幸彦は海幸彦の貸してくれた大事な釣り針を失くします。海幸彦は怒って、「どうしてもあの釣り針を返してくれ」と言って攻め立てます。山幸彦は途方に暮れて、涙を浮かべて海辺に座り込んでいると、そこへ潮の流れを司る塩椎神(シオツチノカミ)が現れ、「なぜ泣いているのか?」と尋ねるので理由を話します。塩椎神は「私があなたの力になりましょう」と言って、竹籠で造った船に山幸彦を乗せ、海神(わたつみ)のいる宮殿に案内します。

そこで海神の娘、豊玉毘女(とよたまびめ)に遭い、お互いに一目ぼれします。山幸彦はここで三年を過ごし、豊玉毘女を連れて帰ってきます。山幸彦が帰る時、海神は、鯛の喉に刺さっていた海幸彦の釣り針を取り、釣り針と共に鹽盈珠(しおみちのたま)・鹽乾珠(しおひのたま)を渡します。潮の満ち引きを司る魔法の玉です。山幸彦は還ってから潮の満ち干を司るため、海幸彦は山幸彦に屈服し、昼夜の守り神となって山幸彦を支えることを誓います。記紀を

読んでいると、海の者は山の者に従い、兄は末弟に従うように設定されていることに気付きます。大和が渡来人を従え、末子相続を前提としたところからきているのでしょう。

さて、豊玉毘女(トヨタマビメ)は妊娠し、出産の場所を探します。「天つ神の御子は海原で生むべきではない」と云われ、海辺の波打ち際に鵜の羽を葦に見立てた産屋を作ります。ところが、鵜の葺草(かや)を葺き合える前に生まれてきます。そのため、そこで生まれた御子は葺草葺不合命(ウガキフキアエズノミコト)と申されます。豊玉毘女は出産時に、山幸彦に「他の世界の者は必ず元の国の形になって産むものです。どうか、見ないでください」と依頼したにもかかわらず、山幸彦は見てしまいます。そこに、八尋和邇(やひろわに)が這ってうねりくねりしていたのを見て驚きます。しかし、豊玉毘女は見られたことの恥ずかしさのあまり海神(わだつみ)の宮に帰ってしまいます。そして御子(みこ)の養育を妹の玉依毘売命(タマヨリヒメ)に託します。

鵜戸神宮(うどじんぐう)は、宮崎県日南市の海辺にあるにある神社です。祭神は葺草葺不合命です。神社は主祭神の産殿の址と伝えられる霊地です。鵜葺草葺不合命は叔母の玉依毘売命を娶り、生んだ子がイワレビコ命、のちの神武天皇です。成長して、神武東征の後、初代の天皇として即位します。天皇時代の始まりになります。

この日向の地には四世紀初頭から中葉にかけて西都原(さいとばる)古墳群が存在します。男狭穂塚(おさほづか)の175mは日本最大の帆立貝形古墳。女狭穂塚(めさほづか)の180mは九州最大の前方後円墳です。それぞれ、瓊瓊杵尊(ににぎのみこと)と木花昨夜姫の墳墓と伝えられています。

参照資料－5：西都原古墳

参照資料－4：山幸彦とトヨタマヒメ

第五話　大和朝廷の誕生とその経緯

約一万五千年前、北方からの大量の移住者の手で旧石器文化が持ち込まれ、縄文文化を作った。その後、紀元前一千年前後に朝鮮半島からの移住者が水稲耕作を持ちこみ弥生文化を作った。そして紀元前後、北九州から大量に西日本へ人口移動し、近畿地方独自の弥生文化が大和から河内にかけて作られる。この地域を畿内(うちつくに)と名付けていた。そうして、古代大和の最初の都市遺跡である纒向(まきむく)遺跡が創られ、大王家の勢力が拡大し、大和朝廷を形作っていく。第五話では大和朝廷までの成長の経緯を全体像として概観する。

◆纒向遺跡と古代大和

古事記には、神武東征でイワレビコノ命が大和に入られた時、長髄彦を従えたニギハヤヒノ命が臣下の礼をとり、大和を平定する。神武東征は完了し、橿原宮(かしはらぐう)で初代天皇、神武天皇が即位し、誕生する。

イワレビコノ命が落ち着く橿原宮の地に纒向遺跡がある。この遺跡から特殊器台・特殊壺・孤紋(こもん)円盤・鶏形(にわとりがた)木製品などの祭祀用具が出土する。この土器は吉備(きび)では弥生時代後期からみられ、吉備が発祥の地であることが明らかになった。前方後円墳の形も吉備の総社市にある宮山古墳(みややまこふん)が原型ではないかと言われている。大和創世記には吉備の活躍が想像できる。

さらに、播磨、尼崎など吉備から纒向への経路に当たる場所で、貝輪(かいわ)の形の白銅の腕輪が出土した。また、住居形式が弥生の九州的遺跡と類似することから北九州の種族が吉備を経由して纒向へ来たと想定されている。ということは、紀元前後、北九州から移動した民は吉備に定住し、そこから徐々に纒向へ進んでいったことになる。

纒向遺跡の前代に、この三輪山の麓に定住した唐子・鍵遺跡などの弥生環濠集落の四遺跡があるが、三世紀初頭に統合されたのであろう。纒向遺跡の規模は平城京と同等の敷地を持つ広大さで、大和の支配層は高床式住居に住み、三輪山からの上水道の設置で円筒形の木製の排水管(樋：ひ)が作られ設置する高度技術も有している。さらに、新嘗祭での交流とみられる農耕神を祀ったと思われる高床式建物跡、祭祀用品を埋めた穴が多く発見された。これらの穴から東は武蔵(東京都と埼玉県)から、西は長門(山口県)至る土器が発掘されが、

農業の跡がない。鋤(すき)は出土するが鍬(くわ)はほとんどないから農業は営んでいない交易と政令都市と判断された。この王権は、高度な技術を持ち、広範囲の勢力を持っていたことが想像できるが、北九州との交流がなく、この纒向遺跡が大陸文化の影響が少ない遺跡であることも特徴である。北九州で見られる前漢鏡、銅矛、甕棺などはほとんど纒向では見られず、銅鐸である。しかし、三世紀中葉に銅鐸が破壊されていることから、ここへ来た支配者が銅鐸祭祀を否定している。そして、三世紀後半には箸墓古墳に代表される前方後円墳が造られ、三角縁神獣鏡を作り、銅鏡祭祀へ移行するのであるから、この三世紀前後に大きな王権の移動があったと考えられる。神武東征の禅定による王権交替の物語を想起させる展開である。

倭迹迹日百襲姫命(ヤマトトトヒモモソヒメノミコト)を埋葬したと言われる前方後円墳「箸墓古墳」を築いた後、古墳時代に推移するが、纒向では古墳は作られ無くなる。それは、それまでのように神との交流の巫女を神として祀るのではなく、大王が体内に「**天皇霊**(すめらみことのみたま)」を受けるという首長霊信仰が出来る。つまり、天皇霊や首長霊を祭る古墳時代に入っていった。

◆纒向遺跡と古代大和

大和朝廷は、古代大和から始まり、奈良時代まで続く。年代で言えば、三世紀から七世紀までである。ここでは、古墳時代が終焉する七世紀初頭までを取り上げていきます。

三世紀後半の書記の崇神天皇(十代)期の記述から、重要な時代の変化を思わせる二点を取り上げます。

一点目は、崇神天皇六年条の記述で、「是より先に、天照大御神、倭大国魂(ヤマトオオクニノタマ)の二神を、天皇の大殿のうちに並べ祭る。然れどもその神の勢いを畏(おそ)りて、共に住み給うに安からず。故、天照大御神をもって豊鍬入姫命(トヨスキイリヒメノミコト)に託け祭りて倭の[注]笠縫邑(かさぬいむら)に祀り、倭大国魂は皇女渟名城入姫命(ヌナキイリヘメノミコト)に祀らせた。」とあります。当時、疫病が流行した原因が二神の争いであるとし、二神を別々の地に分けて祀ったということです。 (注)笠縫邑とは現在の檜原(ひばら)神社のあるところと言われている。

ところが、倭大国魂を祀っていた皇女渟名城入姫命頭の毛が抜け、体がやせ細り祀れなくなる。すると、夢枕に大物主大神が現れ宣託された。「もしわが子、大田田根子(オオタタネコ)に我を祀らせればたちどころに平らぐだろう」と。大田田根子を探し、祀らせると疫病は治まったとある。この話は、前述したが、三輪山の神とし

て一つに統一されていた神を、葦原中国の神である大物主神、太陽神としての天照大御神、大和の地主神としての倭大国魂神に、三分割したことを意味している。つまり、出雲の勢力を解体し、太陽神としての天照大御神を分離し、伊勢信仰を作り上げる基点を創ったことを表している。もう一つは、

崇神天皇九年九月九日条の「四道将軍」である。大彦命(オオビコノミコト)を北陸道に、武淳川別命(タケヌナカワワケノミコト)を東海道、吉備津彦命(キビツヒコノミコト)を西道(山陽道)、丹波道主命(タンバミチヌシノミコト)を丹波(山陰道)の四道に遣わされた。詔して「もし教えに従わないものがあれば兵を以て打て」と。注印綬を授かり将軍となる。崇神天皇期に大和朝廷の勢力を四道に拡大したことを表している。西海道(九州)、南街道(四国)、東山道(中山道)の将軍はいないので、まだ統治下にはいっていないことを示している。しかし、本土の主要部分を納めた天皇であり、崇神天皇は最初に国土を統治した天皇という意味の御肇國天皇(ハツクニシラススメラミコト)という称号が与えられたという。(注)印授とは、徳川時代の葵の御紋のような権威を示す首にかける組みひもをいう。

四世紀になると、大王自身が「天皇霊」を受ける形に変化する。三世紀末に箸墓古墳が造られたが、墓の主は三輪山の神、大物主大神の妻の倭迹迹日百襲姫命(ヤマトトトヒモモソヒメノミコト)である。纒向遺跡が出来た当時は神の声を聞けるのは巫女に限られたのであろう。この姫は大和朝廷の権威の象徴である前方後円墳の第一号の箸墓古墳(はしはかこふん)におさめられている。しかし、この古墳以降、纒向では古墳は作られず、纒向以外の地で天皇霊の古墳として前方後円墳が造られるようになることは前述した。

五世紀になると、朝鮮との関係が強化され、大和朝廷の本拠地は大和から朝鮮経営に便利な河内へ移動する。宮都は難波宮(なんばぐう)と言われる。

古代大和は姿を消し、応神天皇(十五代)陵のある古市(ふるいち)古墳群、仁徳天皇陵(十六代)のある百舌鳥(もず)古墳群が河内地域に歴史的遺跡として残る。朝鮮半島では、朝鮮の北方の高句麗が南下政策を執り、百済、新羅、伽耶との戦いが始まる。そのことから、大和への支援依頼が増え、朝鮮との軍事関係強化が図られることになる。そのため五世紀の巨大古墳の周りには多くの注陪墓(ばいちょう)が造られ、大量の刀剣、甲冑、馬具、鉄製農具、金銀の装飾具が埋葬された。大王の性格が「司祭者」から「軍事的・政治的支配者」へ変化したことを物語る。(注)主人の墓に伴う従者の墓。

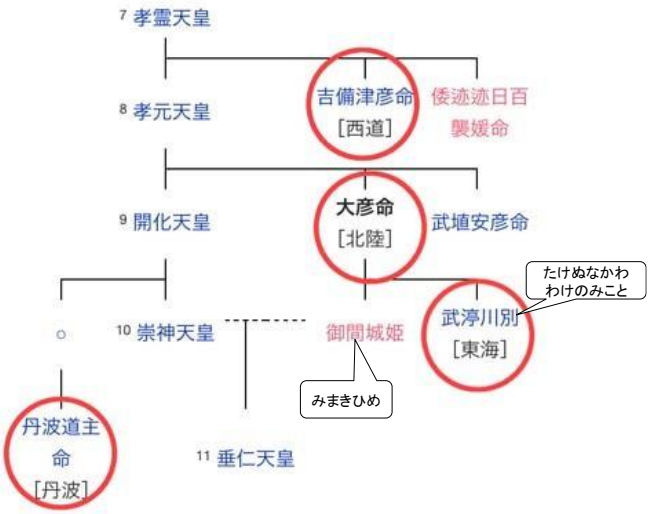
日本書紀ではその時期を応神天皇(十五代)から雄略天皇(二十一代)時代に当て、、倭の五王時代と言う。

六世紀から七世紀初頭には、大和朝廷は飛鳥へ遷都する。百済を通して六朝文化を取り入れ、聖徳太子のもとに飛鳥文化を築く。中国(隋)との国交を開いて仏教等の先進文明を取り入れ、古墳時代を終焉する。太子は「世間虚

仮　唯仏是真(せけんこけ　ゆいぶつぜしん)」(この世は移ろい易く、仏の言うことだけが本当なのだ)と諭され仏教寺院を建てていった。このことで、首長霊としての巨大古墳は消え、阿弥陀如来や仏陀が信仰の対象になっていった。

参照資料－6：四道将軍配置

参照資料－7：四道将軍系図



コラム【天孫降臨の随伴神】

天孫降臨の随伴神は「五伴諸(いつとものお)」と「七警備神(しちけいびしん)」を合わせ十二神である。記紀には素性は書かれてないが、『古語拾遺』などから、各神の素性が分かる。降臨時や降臨後の顛末を追記すると、天児屋根命と布刀玉命はアマテラスを祀る神殿(伊勢神宮)の守護神になるよう命じられた。天宇受賣命は降臨時の縁で猿田毘古命と結婚する。伊斯許理度売命は作鏡連(かがみづくりのむらじ)らの祖神、玉祖命は玉造部(たまつくりべ)の祖神とされる。

参照資料－9:天孫降臨随伴神の素性

随伴形	神　名	素　性
五伴諸（いつとものお）	天児屋根命（アメノコヤネ）	天岩戸伝承で祝詞を奏上した祝詞の神
	布刀玉命（フトダマ）	天岩戸伝承で鏡を天照に捧げた祭祀の神
	天宇受賣命（アメノウズメ）	天岩戸伝承で踊りを披露した芸能の女神
	伊斯許理度売命（イシコリドメ）	天岩戸伝承で八咫鏡を製作した神
	玉祖命（タマノオヤ）	天岩戸伝承で八尺瓊勾玉を製作した神
七警備神	思金神（オモイカネ）	天岩戸伝承他、あらゆる軍議で助言を呈してきた智恵の神
	天手力男神（アメノタヂカラオ）	天岩戸伝承で岩戸を蹴散らし、アマテラスを救出した腕力の神
	天石門別神（アマノイハトワケ）	天岩戸の管理をしていた門番を司る神
	天忍日命（アメノオシヒノミコト）	高皇産霊尊の子。大伴氏の祖先神。天孫降臨の際,天津久米命とともに,弓矢をもって先導した。
	天津久米命(アマツクメノミコト)	久米氏の祖先神。邇邇芸命が降臨するとき, 天忍日命とともに先導をしたといわれる。
	猿田毘古命（サルタヒコ）	瓊瓊杵尊(ニニギノミコト)が地上に降ったとき,先導した神。
	登由宇気神（トヨウケ）	伊勢神宮外宮(豊受大神宮)の祭神。ケは食物の意,この神は内宮の天照大神に仕える食物神。

出典:「海道東征」をゆく(産経新聞社)、「古事記」(竹田恒泰著、学研)他